

早瀬 晋三

歴史的に見て、フィリピンのイスラーム教徒は海上で活躍した人々である。スルー(Sulu)諸島の住民は地理的に見て海を生業とした人々であることは一目瞭然であるが、ミンダナオ(Mindanao)島のコタバト(Cotabato)市を中心とするマギンダナオ(Maguindanao)族はミンダナオ川河畔に居住し、海へ出ていった人々である。ラナオ(Lanao)湖周辺に居住するマラナオ(Maranao)族は、その南に居住しマギンダナオ・スルタネイト(sultanate イスラーム王国)の海軍力となったイラヌン(Ilanun)族と近縁関係にあり、マラナオ族自身湖ばかりでなく、海へも進出した。しかし、これら海上で活躍した人々も、注意深く見ると3つのグループにわけて考えることができる；(1)スルタネイトを築いた民族、(2)スルタネイトに従属し、海軍力となった民族、そして、(3)権力と結び付かないいわゆる漂海民である。これらの海洋民をそれぞれの特性を考えてイスラームとのかかわりを考える必要があるだろう。(1)のスルタネイトを築いた民族は、スルーのタウスグ(Tausug)族、マギンダナオのマギンダナオ族であるが、これらの民族は陸上生活を基盤に持っている。マギンダナオ族はとくにその傾向が強い。海上支配者、「海賊」として名高い民族であるが、自らが海洋民であるというよりむしろ(2)の海洋民を使って海上で活躍したといったほうがいように思える。かれらには、陸上という基盤があり、攻撃されたときに逃げ込む後背地があったために、長くイスラーム国家として存続できたと考えられる。しかし、一方で陸上支配を拡大するための中央集権制度の確立にはいたらなかった。それは、海軍力に比べ陸軍力が弱かったこと、土地の支配に無頓着であったことなどの理由が挙げられる。(2)の権力に従属した海洋民として、サマ(Sama)族、イラヌン族などが挙げられるが、かれらは自ら王国を築くようなことはなかった。その移動性と統合のシンボルを見い出せなかったことが、

民族をまとめることを妨げたともいえる。とすると、さらに移動性が強く、結束力の弱い(3)の漂海民であるバジャウ(Badjao)族などは自ら権力基盤を築くこととは無縁の存在で、イスラーム化も近年まで進まなかった。海洋民と一言でいっても、本来人間が生活のより所として求める陸との関係でそれぞれを把握する必要があるだろう。

以上のことを念頭においてフィリピンのイスラームを考えた場合、インドネシアやマレーシアに比べ、イスラームのもつダイナミズムが国家統合の原理として働いていないことに気づく。フィリピンのイスラーム教徒は、ほかの地域のイスラーム教徒に比べ、敬虔でないとはいわないが、少なくともイスラームが社会・国家の制度化に役立っていないことは事実である。したがって、分離独立運動を求めるグループも、具体的なイスラーム国家のビジョンを欠いたまま、キリスト教徒との対比においてのみ運動が進められているように思える。この欠落のひとつの理由として海洋民のもつ移動性を考えることもできるが、もしそうなら海洋民の移動性とイスラームによる制度化との関係を論議する必要がある。

移動性ということを取り上げるなら、イスラーム成立時のアラブ世界も同様の要素をもっていた。遊牧民の部族社会という点では、その移動性と分散性はフィリピンのイスラーム社会に共通することである。しかし、アラブ世界は、その移動性と分散性を克服し、さらに利用することによってイスラーム国家を建設し、拡大していった。移動をともなうイスラーム商人の貿易活動は、中央集権化と軍事的拡大に貢献し、都市形成の原動力となった。ここでは、イスラーム商人が経済活動の主導権を握っていた。しかし、フィリピンの場合、貿易の主導権を中国人商人やヨーロッパの商人に握られ、自ら貿易を管理する制度は未発達のままであった。そして、なによりフィリピンのイスラーム教徒が自ら進んで貿易活動に出向くことがあまりなかったことが、受け身の貿易になったといえよう。

フィリピンのイスラーム教徒にとって、マイナス要因のひとつとなったのはその地理的位置である。インドネシアやマレーシアが、インド洋を隔てて直接

アラブ世界と向き合い、またインドとの古来からの関係を通じてイスラーム化したインドからイスラームの息吹を吸収したのに対し、フィリピンはもともとインドの影響は少なく、北・中部がスペインの植民地となり南部もその影響下にあると考えられたために、インドネシアやマレーシアのスルタネイトとの交流もあまり活発に行われなかった。そして、インドネシアがオランダ、マレーシアがイギリスの支配下に入るとますますその交流は制限されるようになった。フィリピンのイスラーム教徒は、ほかの東南アジアのイスラーム社会から孤立化したとまでは言わないにせよ、制度化のための刺激を受けることなく、1898年のアメリカ合衆国のフィリピン領有を迎えることになった。

アメリカ合衆国との局地的な激しい戦闘の後、1915年にスルタンの世俗権が奪われると、アメリカの持ち込んだ価値観と制度のため、フィリピンのイスラーム社会は大きく歪められることになった。アメリカ的教育を受け、アメリカ的価値観を身につけたイスラーム教徒にとって、批判としての欧米物質至上主義はあっても、制度化したイスラーム社会・国家を建設する展望は欠くことになった。そこでは、海洋民の持つ移動性は、アメリカ的中央集権下で、非効率で前近代的なものとして把握された。その結果、人々は移動より定住を望むようになり、海洋民のもつ移動性のダイナミズムは次第に失われ、移動性がイスラーム社会・国家への制度化にマイナスに働くようになったと考えられる。

フィリピンのイスラーム教徒の社会が、制度化をとまなうイスラーム社会・国家へと変貌するには、フィリピンのイスラーム教徒による大きな意識改革が必要であろう。現在、フィリピン南部で分離独立あるいは自治権を求める運動が活発な地域は、たしかにイスラーム教徒が多数居住する、あるいは、かつて居住した地域である。しかし、イスラーム社会・国家建設のためにはイスラームの社会的・政治的な教義を社会・国家生活に自覚的に適用し、かつこれらの教義を社会・国家の基本的機構のなかに組み入れ、具体的に運用する必要がある。運動の主体性をイスラームに求め、イスラーム社会・国家の建設への展望が開けたなら、移動性や部族社会を克服した、より具体的な分離独立運動に発展することになるだろう。しかし、かれらがアメリカ的制度下のフィリピン共

和国内でのイスラーム社会の建設で満足するなら、より穏健な自治権の要求に留まるだろう。さらに、もしかれらが、アメリカ的価値観・制度下でのイスラーム教徒に満足し、イスラームによる社会の制度化より伝統的な社会・秩序を重視し、維持することを望むなら、イスラーム教徒の結束を呼びかける運動は発展しないだろう。フィリピンのイスラーム教徒は、フィリピン共和国内で少数派であるだけに帰属意識をどこに置くかで、将来の方向性が違ってくるといえよう。